

ひとを育てる活動

臨床検査技師を目指す奨学生ザイラの応援団募集！

成績優秀で4年に進級・病院実習に入ります



3年間の学業修了式典「ピンセレモニー」に臨んだザイラ

6月中旬、「支援いただいた娘のザイラ、おかげで優秀な成績で3年次を修了しました！」という嬉しい報告が、母親であるナプサさんから届きました。

3年前の5月29日、麻薬犯罪者の超法規的処刑など、ドゥテルテ政権の強権政治に反対していた父親ハッサン(バランガイ・カワスの村長)が凶弾に倒れてまもなく、念願だった臨床検査技師コースに入学が決まったザイラ。医療系の学科はいずれも学費が格段に高く、チボリとビラーンの医師各1名、看護師、助産師数名も、それぞれ支援の申し出をいただいた会員による特別奨学金等で支援してきました。一方、ザイラについては父親の不慮の死という緊急事態を受けて、急遽支援対象に加えることになり、

HANDSとしての全体支援で支えてきました。

年度休暇に続いて始まる病院実習を含む最終学年4年次は、授業料ほか各種経費の合計が20万ペソ(約50万円)と、多額になることが分かりました。

助産所事業はほぼ軌道に乗ったとはいえ、代表のナプサさん自身は無償勤務と聞いています。一方、当団体も本年度末の法人解散、活動収束に向けて準備中で、退会会員の増加等、教育支援会費収入の漸減が懸念されます。

すでに先住民族や地域住民のために働くチボリやビラーンの各種医療専門家に続き、イスラム系サンギル民族の臨床検査技師誕生に向けて、今一度皆様のご理解とご協力をいただければ幸いです。随時のご寄付等で応援をどうぞよろしくお願いいたします。

卒業おめでとう！

CMIP 新規卒業生と在校生の今後の支援

7月中旬、CMIPを通じて支援の4名がそれぞれカレッジを卒業しました。3名は教育学部、1名は刑法専攻です。例年卒業生は、右下で紹介のナブル小で1年間、常勤の半分程度の給与で教育実習に励み、公立校教師の採用条件である国家試験合格を目指すことになっていて、すでに3人はナブルに向かったと聞きました。その一人シェイラメイ(写真)はナブル村出身で、母校で教師見習いをするようになります。

なお、学業半ばのカレッジ生3名は、法人解散後も任意団体として卒業までを支える予定です。



おめでとう！
英文科卒シェイラメイ

辺境での初等教育に欠かせない給食プログラム

チボリの先住民族学校とビラーンのナブル小学校へ

給食プログラム専用のスペースがあれば・・・！



狭い教室での給食タイム

幼稚園児や小学校低学年の子どもたちが通える距離に学校(SCMSI校や公立校)がなかったレイクセブ町辺境の村ティヌオス。住民の要望により、2006年に小規模私設学校を設立したアニータ先生(元SCMSIハイスクール校長)。私たちHANDSとの出会いは、2014年からこの地域でPFPと協働したアグロフォレストリーでした。

事業終了後、PFP会計担当のビビアンさんの仲介で一部会員により始めた先住民族学校/ILS運営支援。3年前のビビアンさんの急逝で、改めて、HANDSの「チボリの子ども」支援の一環として、教師給与の支援とともに女性組合育成、ヤギ他家畜飼育など、将来の学校運営の自主財源の創出に関わる事業を開始しました。

年度末にはNPO法人としての活動収束を予定している当団体ですが、支援規模の大小を問わず、日々届くアニータ先生からの写真による報告を通じて、いずれも確かな実りを結んでいることが実感できます。

テーブル、食器収納棚、手洗い・歯磨き用洗面所、そして、キッチンを備えた今回の給食スペース設置の支援要請も、子どもたちの健全な心身の成長に役立つものになると確信しています。なお、キッチンは、「黙想の家」を販路とする母親たちのピクルス作りにも使用したいとのこと。

辺境の初等教育を支える「給食支援」に感謝！

1960年のボルルール小に始まり、辺境のビラーンやチボリ民族の村における学校開設や運営で、初等教育の普及に尽力してきたCMIP/カトリック先住民族ミッション。近くに公立校が出来たことで、ボルルールとキアミ校は閉校しましたが、今もアトモロック等4校が、給食の実施を含めて、山の子どもたちの心身の健全な成長を支えています。うち、2011年に鎌ヶ谷の市民グループICECKの協力で建設・開校のナブルカマガヤ小は約200名が在籍、CMIP最大規模の学校になっています。

児童数増加に対して私たちの支援は会員漸減の中、今年は10万ペソ(約25万円)と、前年より2万ペソ減額しました。

現地のお米代(45ペソ/kg)から試算すると、私たちの年間支援25万円はナブル小の1年間のお米代にあたります。

大好きなご飯が食べられる給食プログラムは、特に低学年では心身の成長に不可欠だけでなく、朝食をとらずに山道を登校する児童にとっては「学校に通い続ける」モチベーションにもなっています。初等教育対象の「教育全体支援会員」の皆様、また、毎年給食費支援の「野のゆり会」の皆様、長期に渡るご協力ありがとうございます。



自宅から持参の容器を手にも並ぶ子どもたち。一方、配膳や炊事を手伝う父母も、給食栄養バランスを考えた食事作りの学びの場になっています。